夏目漱石
名は金之助。文學博士。大正五年歿、年五十。

一五　カーライルの舊廬

夏目漱石

公園の片隅に通りかゝりの人を相手に演說をしてゐるものがある。向から來た釜形の尖つた帽子を被つて、古ぼけた外套を猫脊に着た爺さんが、そこへ歩みを停めて演說者を見る。演說者はぴたりと演說をやめて、つか〳〵と此の村

夫子の倅んでゐる前に出て來る。二人の視線がひたと行當る。演説者は濁つた田舍調子で、「御前はカーライルぢやないか。」と問ふ。「いかにもわしはカーライルぢや。」と村夫子が答へる。「チェルシーの哲人と人が言囃すのは御前のことか。」と問ふ。「なるほど世間では、わしのことをチェルシーの哲人といふやうぢや。」と答へる。「セージといふのは鳥の名だのに、人間のセージとは珍しいな。」と、演説者はから〳〵と笑ふ。村夫子は「なるほど、猫も杓子も同じ人間ぢやのに、殊更に哲人などと異名をつけるのは、あれは鳥ぢやと渾名すると同じやうなものだらう。人間はやはり當り前の人間でよかりさうなものだに。」と答へて、これもから〳〵と笑ふ。

カーライル　英國の哲學者。
Carlyle
チェルシー　テームス河畔の地區。
Chelsea
セージ
Sage

カーライルは居らぬ。演説者も死んだであらう。併しチェルシーは以前の如く存在してゐる。否、彼の多年住古した家屋敷さへ、今尚儼然と保存されてゐる。千七百八年チェインロウが出來てから此の方、幾多の主人を迎へ、幾多の主人を送つたかは知らないが、とにかく今日まで昔のまゝで殘つてゐる。カーライルの歿後は、有志家の發起で、彼の生前使用した器物・調度・圖書・典籍を蒐めて、これを各室に按排し、好事の者にはいつでも縱覽させる便宜さへ圖られた。

文學者でチェルシイに緣故のある者を擧げると、昔はトマス、モア、下つてスモレット、尚下つてカーライルと同時代にはハントなどが最も著名である。ハントの家はカーライ

チェインロウ
Cheyne Row
チェルシーの中の一區。
トマス、モア
Thomas Moor
英國の政治家。
スモレット
Smollett
英國の小說家。
ハント
Hunt
英國の詩人。

シルレル　Schiller　獨逸の詩人。
エリオット　Eliot　英國の閑秀小說家。
ロセッチ　Rosetti　英國の詩人、畫家。

ルのすぐ近傍で、現にカーライルが此の家に引移つた晩尋ねて來たといふことが、カーライルの記錄に書いてある。又ハントがカーライルの細君にシルレルの塑像を贈つたといふことも知れてゐる。此の外にエリオットのゐた家とロセッチの住んだ邸が、すぐ傍の川端に向いた通にある。併し此等は皆既に代が變つて、現に人が住まつてゐるから見物は出來ぬ。唯カーライルの舊盧だけは六ペンスを拂へば、何人でも、又いつでも隨意に觀覽が出來る。チェインロウは河岸端の往來を南に折れる小路で、カーライルの家はその右側の中頃にある。番地は二十四番地だ。

毎日のやうに川を隔てて霧の中にチェルシーを眺めた

ハンプステッド　Hampsted　ロンドン郊外の町。

余は、或朝遂に橋を渡つて、その有名な庵を叩いた。庵といふと物寂びた感じがある。少くとも瀟洒とか風流とかいふ念を伴なふ。併しカーライルの庵はそんな脂(あぶら)つこい華奢なものではない。往來から直に戸が敲ける程の道傍に建てられた、四階造の眞四角な家である。出張つたところも引込んだところもない。のべつに眞直に立つてゐる。まるで大製造場の煙突の根本を切つて來て、これに天井を張つて、窓を附けたやうに見える。

これが、彼が北の田舍から始めてロンドンへ出て來て、探しに探し拔いて、やう〳〵のことで探しあてた家である。彼は西を探し、南を探し、ハンプステッドの北まで探して、終に

恰好の家を探し出すことが出來ず、最後にチェインロウへ來て、此の家を見てもまだすぐに取極めるほどの勇氣がなかつたのである。四千萬の愚物と天下を罵つた彼も、住家には餘程閉口したものと見えて、彼はその夫人へ向けて委細を報知して意向を確め、夫人の上京するまで手を束ねて待つてゐた。四五日すると夫人が來た。そこで今度は二人して又東西南北を驅廻つた揚句のはて、やはりチェインロウがよいといふことになつた。兩人がこゝに引越したのは千八百三十四年の六月十日で、引越の途中に、下女の持つてゐたカナリヤが籠の中で囀つたといふことまで知れてゐる。夫人が此の家を選んだのは、大に氣に入つたものか、外に相當

クロンウェル Cromwell 英國の政治家。
フレデリック大王 Frederic プロシヤの王。
ヂスレリー Disraeli 英國の政治家。

なのがなくて已むを得なかつたのか、いづれにもせよ、この煙突のやうな四角な家は、年に三百五十圓の家賃を以て、この新世帶の夫婦を迎へたのである。カーライルは此の家の中で、クロンウェルを著し、フレデリック大王を著し、ヂスレリーの周旋にかゝる年給を斥けて、四角四面に暮したのである。

余は今この四角な家の石階の上に立つて、鬼の面のノッカーをこつ〳〵と敲く。暫くすると、内から五十恰好の太つた婆さんが出て來て、「御はひり。」と云ふ。最初から見物人と思つてゐるらしい婆さんはやがて名簿のやうな物を出して、「御名前を。」といふ。余はロンドン滯在中四度此の家に入り、四

度此の名簿に余が名を記錄した覺がある。この時は實に余の名の記入初であつた。なるべく丁寧に書くつもりであつたが、例によつて甚だ見苦しい字が出來上つた。前の方を繰りひろげて見ると、日本人の姓名は一つもない。して見ると、日本人てこゝへ來たのは余が始めてだなと、下らぬことが嬉しく感ぜられる。婆さんが「こちらへ。」といふから、左手の戸をあけて、町に向いた部屋に這入る。これは昔客間であつたさうだ。色々な物が並べてある。壁に畫やら寫眞やらがある。大概はカーライル夫婦の肖像のやうだ。後の部屋にカーライルの意匠になつたといふ書棚がある。それに書物が澤山詰つてゐる。むつかしい本がある。下らぬ本がある。古びた本

ビスマーク Bismark 獨逸の大宰相。

がある。讀めさうもない本がある。その外にカーライルの八十の誕生日の記念の爲に鑄たといふ銀牌がある。金牌は一つもなかつたやうだ。それから二階に上る。こゝにまた大きな本棚があつて、本が例の如く一杯詰つて居る。やはり讀めさうもない本、聞いたことのなささうな本が多い。勘定をしたら百三十五部あつた。此の部屋も一時は客間になつてゐたさうだ。ビスマークがカーライルに送つた手紙と、ブロシヤの勳章とがある。フレデリック大王傳のお蔭と見える。細君の用ひた寢臺がある。頗る不器用な飾氣のないものである。

案内者はいづれの國でも同じものと見える。さつきから

婆さんは室内の繪畫・器具に就いて、一々説明を與へる。五十年間案内を專門に修業したものでもあるまいが、非常に熟練してゐる。何年何月何日どうしたかうしたと、恰も口から出任せに饒舌つてゐるやうである。而も其の流暢な辯舌に、抑揚があり、節奏がある。調子が面白いから、その方ばかり聽いてゐると、何をいつてゐるのか分らなくなる。初の内は聽返したり、問返したりして見たが、仕舞には面倒になつたから、御前は御前で勝手に口上を述べなさい、わしはわしで自由に見物するからといふ態度をとつた。婆さんは人が聽かうが、聽くまいが、口上だけは必ず述べますといふ風で、別段厭きた氣色もなく、怠る樣子もなく、何年何月何日をやつてゐる。

余は東側の窓から首を出して、一寸近所を見渡した。眼の下に十坪位の庭がある。右も左も、又向も、石の高塀で仕切られて、その形はやはり四角である。四角はどこまでも此の家の特色かと思ふ。カーライルの顏は決して四角ではなかつた。彼は寧ろ懸崖の中途が陷落して、草原の上に伏しかゝつたやうな容貌であつた。婆さんはまた何年何月何日を誦し出した。余は再び窓から

カーライル

首を出した。

カーライル言ふ。「裏の窓より見渡せば、見ゆるものは茂る葉の木株、碧なる野原及びその間に點綴する勾配の急なる赤き屋根のみ。西風の吹く此の頃の眺は、いと晴れやかに心地よし。」と。余は茂る葉を見ようと思ひ、青い野を眺めようと思つて、實は裏の窓から首を出したのである。自分は既に二遍ばかり出したが、青いものも何も見えない。右に家が見える。左に家が見える。向にも家が見える。その上には鉛色の空が一面に不承々々に垂れかゝつてゐるだけである。余は首を縮めて窓から中へ引込めた。案内者はまだ何年何月何日の續を朗かに讀誦してゐる。

ウェストミンスター、アベー　Westminster Abbey　英國の大寺院の一。

セント、ポールス　St. paul:　英國の大寺院の一。

カーライル又言ふ。「ロンドンの方を見れば、眼に入るものはウェストミンスター、アベーとセント、ポールスの高塔の頂のみ。その他幻の如き殿宇は煤を含む雲の影の去るに任せて隱見す。」と。ロンドンの方とは既に時代後れの語である。今日チェルシーに來て、ロンドンの方を見るのは、家の中に坐つて家の方を見ると同じ理窟で、自分の見當を眺めるといふのと大した差異はない。併しカーライルは自らロンドンに住んでゐるとは思はなかつたのである。彼は田舍に閉居して、都の中央にある大伽藍を遙かに眺めた積りであつた。余は三度首を出した。そして彼の所謂ロンドンの方へと視線を延ばした。併しウェストミンスターも見えない、セン

ト、ポールスも見えない。數萬の家、數十萬の人、數百萬の物音は、余と堂宇との間に立ちつゝある、漾ひつゝある、動きつゝある。千八百三十四年のチェルシーと今日のチェルシーとは、まるで別物である。余は又首を引込めた。婆さんは默然として余の背後に佇立してゐる。

三階に上る。部屋の隅を見ると、冷やかにカーライルの寢臺が横たはつてゐる。青い戸帳が物靜かに垂れて、空しい臥床の裡は寂然として薄暗い。木は何の木か知らないが、細工は唯無器用で、素朴であるといふ外に、何等の特色もない。その上に身を横たへた人の身の上も思ひ合はされる。傍には彼が平生使用した風呂桶が、九鼎のやうに尊げに置かれてある。風呂桶とはいふものの、バケツの大きいものに過ぎない。彼が此の大鍋の中で、ロンドンの煤を洗ひ落したかと思ふと、益、その人となりが偲ばれる。ふと首を上げると、壁の上に彼が往生した時に取つたといふ漆喰製の面型がある。此の顏だなと思ふ。此の炬燵櫓くらゐの高さの風呂に入つて、この質素な寢臺の上に寢て、四十年間やかましい小言を吐續けに吐いた顏は、これだなと思ふ。婆さんの淀みない口上が、電話口で横濱の人の挨拶を聽くやうに聞える。「宜しければ上りませう。」と婆さんがいふ。余は既にロンドンの塵と音とを遙かの下界に殘して、五重の塔の天邊に獨坐するやうな氣分がしてゐるのに、耳の元で「上りませう。」といふ催促を

受けたから、まだ上があるのかなと不思議に思つた。さあ上らうと同意する。上れば上るほど怪しい心持が起りさうであるから。

四階へ來た時は、縹渺として何事とも知らず嬉しかつた。嬉しいといふよりは、どことなく妙であつた。こゝは屋根裏である。天井を見ると、左右は低く、中央が高く、馬の鬣のやうな形をして、その一番高い脊筋を通して、硝子張の明り取が着いてゐる。此のアチックに洩れて來る光線は、皆頭の上から眞直に這入る。さうして其の頭の上は、硝子一枚を隔てて全世界に通ずる大空である。眼を遮る物は微塵もない。カーライルは自分の經營で此の室を作つた。作つて之を書齋と

アチック Attic 屋根裏、部屋。

した。書齋としてこゝに立てこもつた。立てこもつて見て、始めて我が計畫の非なることを悟つた。夏は暑くて居りにくく、冬は寒くて居りにくい。案內者は朗讀的にこゝまで述べて余を顧みた。眞丸な顏の底に笑の影が見える。余は無言のまま頷く。

カーライルは何の爲に此の天に近い一室の經營に苦心したのか。彼は彼の文章の示す如く、電光的の人であつた。彼の癇癖は彼の身邊を圍繞して、無遠慮に起る音響を無心に聞流して、著作に耽るの餘裕を與へなかつたと見える。洋琴の聲、犬の聲、鷄の聲、鸚鵡の聲、一切の聲は悉く彼の銳敏な神經を刺激して、懊惱已む能はざらしめた極、遂に彼をして天

に最も近く、人に最も遠ざかつた住居を、この四階の天井裏に求めさせたのである。豫期された書齋は二千圓の費用で、まづ〳〵思ひ通りに落成を告げて、豫期通りの效果を奏したが、これと同時に思ひがけない障害が、またも主人公の耳邊に起つた。なるほど洋琴の音もやみ、犬の聲もやみ、鷄の聲、鸚鵡の聲も案の如く聞えなくなつたが、下層にゐる時は考だに及ばなかつた寺の鐘、汽車の笛、さては何とも知れず遠くから來る下界の聲が、呪のやうに彼を追ひかけて、舊のやうに彼の神經を苦しめた。例の婆さんが、「どうです、下りませう。」と促す。一層を下る毎に、下界に近づくやうな心持がする。冥想の皮が剝げるやうに感じられる。階段を降切つて、最下の欄干に倚つて、通を眺めた時には、遂に依然たる一個の俗人となり了つた。案内者は平氣な顏をして「厨を御覽なさい。」といふ。厨は往來よりも下にある。今余が立ちつゝあるところから、また五六段の階を下らねばならない。これは今案内をしてゐる婆さんの住居になつてゐる。隅に大きな竈がある。婆さんは例の朗讀調を以て、「千八百四十四年十月十二日、有名な詩人テニソンが始めてカーライルを訪問した時、彼等兩人は此の竈の前に對坐して、互に煙草を燻らすだけで、二時間の間一言も交へなかつたのであります。」といふ。天上にあつて音響を厭うた彼は、地下に入つても沈默を愛したものか。

テニソン Tennyson 英國の詩人。

最後に勝手口から庭に案内される。例の四角な平地を見廻すと、木らしい木、草らしい草は少しも見えない。婆さんの話によると、昔は櫻もあつた、葡萄もあつた、胡桃もあつたさうだ。カーライルの細君は或年二十五錢ばかりの胡桃を穫たさうだ。婆さんいふ、「庭の東南の隅を距る五尺餘の地下には、カーライルの愛犬ニロが葬られてゐます。ニロは千八百六十年二月一日に死にました。墓標も當時は存してゐましたが、惜しいかな、その後取拂はれました。」と、なか〳〵くはしい。

カーライルが麥稈帽を阿彌陀にかぶつて、寢卷姿のまゝ咿へ煙管で逍遙したのは、此の庭園である。夏の最中には、陰深い敷石の上にさゝやかな天幕を張り、その下に机をさへ出して餘念もなく述作に從事したのも、此の庭園である。星明らかな夜、最後の一ぷくをのみ終つた後、彼が空を仰いで、「嗚呼余が最後に汝を見るの時は瞬刻の後ならん。全能の神の造れる無邊大の劇場、眼に入る無限、手に觸るゝ無限、これもまた我が眉目を掠めて去らん。而して余は遂にそを見るを得ざらん。我が力を致せるや虛ならず、知らんと欲するや切なり。而も我が知識はたゞ此の如く微なり。」と叫んだのも、此の庭園である。

余は婆さんの勞に酬いる爲に、掌の上に一片の銀貨を載せた。「有りがたう。」と云ふ聲さへも朗讀的であつた。一時間の

後、ロンドンの塵と煤と車馬の音とテームス河とは、カーライルの家を別世界の如き遠い方へと隔てた。（漾虛集）

伴蒿蹊
名は資芳。國學者。文化三年歿、年八十八。

春滿
荷田春滿。國學者。（二三二八―二三九六）

在滿
荷田春滿の甥。國學者。（二三六六―二四一一）

契沖
大阪の僧。國學者。（二三〇〇―二三六一）

南郭服部氏
名は元喬。儒者。荻生徂徠の門人。（二三四三―二四一九）